

敦賀発電所敷地内破碎帯 規制委有識者会合評価書の概要

有識者会合評価書:2013.5.22

1. K断層は後期更新世以降の活動が否定できない

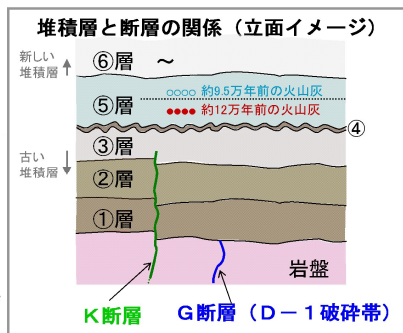
- ・K断層は③層をずらしているが、⑤層はずれが達していない
- ・⑤層下部の火山灰が少なく信頼性が相当低く、後期更新世の地層であることが否定できない
- ・礫の風化の程度から、③層と⑤層は堆積時期に差がない
- ・③層は後期更新世の地層であることが否定できない

2. K断層及びG断層とD-1破碎帯は、一連の構造である可能性が高い

- ・薄片観察(顕微鏡観察)による変位センス(ずれの向き)の認定には限界があること等から、最新活動面の変位センス(最後のずれの向き)を認定していない可能性がある。
- ・一般的に断層は屈曲、分岐、並走したりする

D-1破碎帯は後期更新世以降の活動が否定できないものであり、したがって耐震指針における「耐震設計上考慮する活断層」であると考え

今後、新たな知見が得られた場合、必要があれば、これを見直すこともあり得るが、その際には、追加調査等によって“後期更新世以降の活動を否定する”客観的なデータを揃えること等が必要である。



有識者会合評価書:2015.3.25

1. K断層は後期更新世以降の活動が否定できない(次頁)

- ・K断層は、少なくとも基盤から③層までを明瞭に変位させている。③層については、粗粒・不均質な堆積物から構成されており、もとの堆積構造も明確ではないため、最新活動時期の層準を確定し活動性を判断する基準としては適当ではない。
- ・その上位の⑤層下部はK断層の変形ゾーン全体を覆っていないことから、同層をもってK断層の活動性を判断し否定することはできない。

2. K断層は、原子炉建屋直下を通過する破碎帯のいずれかと一連である可能性が否定できない(次々頁)

- ・K断層がD-1トレンチ南方においてほとんど変位が認められなくなると限定することはできず、また南方へ連続している可能性も否定できない。さらに、2号炉原子炉建屋直下には、D-1破碎帯ほか多数の破碎帯が存在しており、またK断層は複数の破碎帯を変位が乗り継いでいる可能性もある。

D-1破碎帯等、敦賀発電所2号炉原子炉建屋直下を通過する破碎帯のいずれかは後期更新世以降の活動が否定できず、したがって、将来活動する可能性のある断層等であると結論した。

この評価書は、有識者会合のメンバーが…平成26年12月10日のピア・レビュー会合までに日本原電から提供された資料と現地調査を基に、…議論した結果を取りまとめたものである。

2号機
原子炉建屋

0 50m
S=1:1000

D-1破碎帯

B14-2ボーリング

K断層
G断層
⑤層下部